まい あーど■ 油彩「雪の多摩川」by 水落武夫

【新連載】たちかわの石仏たち①

砂川九番の『庚申塔』

砂川九番の地蔵尊内には、二基の青面金剛の石仏があります。一つは鬼を踏みつけ、一つは「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿が彫られています。鬼の方はかつては道標として使われたもので、市内では一番古い庚申塔です。江戸時代、長生きを願って庚申の日や年に、一晩中眠らないで過ごす信仰が広まりました。これを仲間と一緒に行なったのが「講」で、農村の暮しの楽しみの一つだったんですね。三猿の方は講が建てたもの。また、青面金剛の手は六本あります。何を持っているのか調べるのも、石仏の見方の楽しみの一つでしょう。

立川市歴史民俗資料館研究員　小坂克信氏・談

●所在地：幸町4-16-2
●建立：慶長19年（1614年／鬼の方）
貞享2年（1658年／三猿の方）

えくてびあんレポート

高校生クラフトマンの情熱、結実す。

マイレッジ・マラソン（ジュニア・クラス）で昭和第一学園が優勝！

わずか十数CCのガソリン消費量を争う競技会「マイレッジ・マラソン」が晩秋の鈴鹿サーキットで行われた。
手作りの車で1リットルあたり何キロ走れるかを競う。
昭和第一学園高等学校機械研究部の若きクラフトマンたちは、目標としてきた千葉県立京葉工業高校の大会十連覇を阻止、堂々の1-2フィニッシュ。その先週に行われた、ホンダ主催の競技会でも優勝し、名実ともに“高校生・省エネ日本一”を勝取ったのである。先輩たちの積上げてきたノウハウと優勝への意地を見事に結実させた。
さあ、新たな目標「鈴鹿で日本記録達成」を掲げ、“立川・昭和一高”の名を世界に知らしめようぞ。

▲優勝した29号車。トップスピードは74～5km/hにもなる。

▶車体が低い分、体感スピードは2倍に。

準優勝ドライバー：堀内秀浩君　　優勝ドライバー：木村武志君　　4位ドライバー：石川文裕君

●マイレッジ・マラソン順位表

順位	車番	エントラント	ドライバー	燃費km/ℓ	平均速度km/h	消費量g	チーム名（J=ジュニア・クラス／S=学生）	
1	269	小倉幸博	西尾昌史	901.909	27.2511	15.08	TEAM1200	
2	285	森田二朗	時任雄一	848.988	35.1895	16.02	水曜クラブ	
3	375	水村典弘	石丸健次	841.633	33.8398	16.16	チーム　ペイント	
4	293	倉本　亨	藤堂めぐみ	783.907	35.1001	17.35	TEAMじゃけん広島	
5	301	武士俣　貞助	小堀泰子	768.406	33.2042	17.7	ゲトリーベ	
6	221	田村繁甲	森　健次	736.372	34.8377	18.47	日本工業大学　自動車部	S
7	29	志鎌敏英	木村武志	702.157	34.9419	19.37	昭和第一学園機械研究部チャレンジャーB	J
8	28	新屋敷　誠	堀内秀浩	675.983	36.0527	20.12	昭和第一学園機械研究部チャレンジャーA	J
9	310	阪本常明	池崎美貴	674.977	36.0517	20.15	SUPER ENDLESS	
10	397	木村正勝	斎藤勝彦	673.306	36.0827	20.20	チームヨイショット！ミツバ	
11	12	白石征樹	池田正人	670.32	37.7581	20.29	千葉県立京葉工業高校　B	J
12	513	熊谷　徹	松元広行	658.315	33.8739	20.66	ECO	
13	287	佐野真一	込山　勇	655.776	33.0988	20.74	T-ARK	
14	416	長谷川　宏	林　美紀	651.067	37.9304	20.89	チーム　ファイアボール	
15	30	高橋　昭	石川文裕	649.823	31.3363	20.93	昭和第一学園機械研究部チャレンジャーC	J

▼エンジン・セッティングは余念なくスタート直前まで続く。

▼疾走する準優勝28号車。

◀517チームが参加したパドック風景。

◀レースを終えてメンバー全員で。

シリーズ この人と1時間⑦

私の「根っこ」はフィンランド、立川に第二の根っこを張りました

橋本ライヤさん
－大学講師・翻訳家・至誠ホーム嘱託－

“ムーミン”の国、北欧フィンランド生まれの橋本ライヤさん（錦町6丁目）。ご主人の正明氏（至誠ホーム・ホーム長）と結婚されて23年になる。ある時は翻訳家として北欧文学を語り、ある時は大学講師として異文化を論じ、そしてある時は至誠ホームのスタッフとしてお年寄りと共に時間を過ごす。もちろんその間、妻・母としての立場も忘れることはない。在日23年とはいえ、言葉も習慣も違う異国の地で発揮されるこのバイタリティー！

ライヤさんの言葉の持つ説得力は、福祉という「文化」が発達した北欧に育ち、現在もその分野に携わる人にしか持てないものなのかも知れない。しかしその目線は、あくまでもこの街に住む「生活者」としてのものだ。ライヤさんは立川での暮らしを“第二の根っこ”と呼ぶ。

立井　ライヤさん、日本に来られて、もうどれくらいですか。

橋本　23年です。

立井　もう23年ですか。どうしてフィンランドのような静かな国から、こんなせわしい国（笑）に？

橋本　結婚ですネ。夫が当時、フィンランドに留学してたんです。向こうで出会って、結婚と同時に日本に来ました。

立井　お生まれはフィンランドのどのあたりですか。

橋本　フィンランドのちょうど真ん中あたり。えーと…（紙にフィンランドの地図を描いて）、この辺、「ラウカー」というところです。人口が一万六〇〇〇人ぐらいの静かな農村です。

立井　実は僕は昔、北欧を廻ったことがあるんです。ノルウェーからラップランドを越えてノールキャップ、ヘルシンキに戻ってデンマークへ帰るというコース。ヒッチハイクで行ったんだけど、全然車が来ない（笑）。

橋本　人がいませんからね。トナカイの方が多かったんじゃないですか（笑）。フィンランド人はヒッチハイクなんかしませんヨ。

立井　まわりは森ばっかりでね、とても寂しかった（笑）。森と湖がとてもたくさんあったという記憶があります。

橋本　そう、フィンランドは森と湖の国ですね。飛行機の窓から下を見ると、森が絨毯のように広がって見えますよ。それに有名なのは白夜ね。

立井　ああ、白夜ねえ。僕が泊ったところではカーテンを二重にしたりして、人口的に夜を「作って」いました。

橋本　ええ、そういう家もありますね。でもその代わり、おちついて仕事ができます。時間がゆっくりだから、いろいろな事ができます、家族で団欒したり…。それから、お伽話をするんです。

立井　お伽話ですか？

橋本　ええ、冬は夜が長いですから、親が子供にお伽話をします。それは自分が子供の頃に聞かされた話を、今度は自分の子供に聞かせるんですね。楽しいお話とか、ちょっと不思議なお話だとか、自由にイマジネーションを膨らませて。フィンランド人は空想好きなんですヨ。ほら、トーベ・ヤンソンもフィンランド人ですヨ。

立井　あ、『ムーミン』！　あれは不思議なキャラクターですね。動物だか人間だか分からないような、でも、惹かれるものがある。

橋本　あんなお話が出来る土壌が、フィンランドにはあるんです。

立井　親子の団欒の様子が目に浮かぶようですね。季節の移り変わりはどうですか？

橋本　日本と同じように四季がありますけれど、春と秋が短くて、夏は3ヶ月ぐらい。冬は半年です。飽きるほど長い（笑）。

立井　じゃあ日本の四季に慣れるのは大変だったでしょう。

橋本　私、日本には季節が5つあると思うんです。春と夏の間に、ほら、雨の季節…。

立井　ああ、梅雨？。

橋本　そうそう、梅雨。それぞれが短いだけじゃなくて、梅雨の季節もあるでしょ。だからよけいに忙しく感じましたね。「もう春なの？」「もう秋？」って（笑）。

立井　言葉の問題はどうでしたか。話をしていても、全然気にならないくらい流暢な日本語ですけれど。

橋本　いえいえ、最初だけ。だんだん夢中になると、ちょっとボロが出ます（笑）。

立井　日本語はこっちに来てから習われたんですか。

橋本　そうです。とても難しかった。私はフィンランドで言葉の教師になるために、ドイツ語、英語、スペイン語をマスターしました。だからちょっと自信があったんです。でも日本語はとっても難しい。「ありがとう」も言えないくらいショックでした。

立井　今はもう不自由はないですか。たとえば電話だとか、テレビだとか。

橋本　電話は大丈夫です、相手がフツウの人だったらネ（笑）。テレビも大丈夫ですね。でも頭が疲れている時は何も入らなくなります。真っシロ（笑）。

立井　それは日本人だって一緒ですよ（笑）。言葉の話で思い出しましたが、むこうの子供たちは本当に英語が上手ですね。僕らみたいな外国人にも、丁寧に英語で挨拶をしてくる。

橋本　フィンランドは公用語が2つあります。フィンランド語とスエーデン語ですね。それにとても早い時期から学校で外国語を習うんです。英語とかドイツ語とか。

立井　そうすると、最低3か国語は話せるようになってしまう。

橋本　フィンランドは小さな国でしょ？　ヨーロッパのはずれで人口も五百万人ぐらい。だから他の国の言葉を知らないと世界で通用しません。だから小さい頃から外国語を勉強するんです。

立井　なるほど、そのあたりの感覚は島国育ちの日本人では感じることが難しいでしょうね…。こうして伺っていると、やっぱり違いはいろいろありますね。そういえば、ライヤさんのご主人は至誠ホームのホーム長をされていますけれども、北欧の国々は福祉の面でとても充実してますよね。日本はどうですか、遅れてますか。

橋本　いえいえ、そんなことはないですよ。「遅れてる」という言葉は私は使いたくないんですが、日本は今、一生懸命勉強してます。とても一生懸命です。素晴らしい。

立井　北欧が福祉の面で先進国といわれているのは、どういうところからなんでしょう？

橋本　そうですね。もともと豊かじゃない国、貧しい国ですからね。

立井　え、そうですか？　貧しいかなあ。

橋本　ええ。今世紀初め頃までは、ヨーロッパで一番貧しかったんですよ。自然は厳しいですし人口も少ないですから、皆で助け合って協力しあうという形や制度が出来やすかったんだと思いますね。

立井　僕は、フィンランドはとても「リッチ」な国だったように記憶してるんです。日本は国民総生産が第何位だとかいってるけど、ひとりひとりの「リッチさ」でいったら、なんだか貧しい国に思えてしまうなあ。

橋本　フィンランド人は、毎日を大切に、充実したものにしようとがんばるんです。働く時は一生懸命働いて、休む時は思いっきり休む（笑）。

立井　気持ちが「リッチ」なんですね。

橋本　でも、具体的に人のために働くということは、ある程度豊かにならないとできませんから。日本が今福祉の問題、特に高齢化福祉について真剣に考えようとしているのは、やっぱり豊かになった証拠。心も「リッチ」になってきたんですヨ。

立井　毎月、工房に送ってくださる『至誠ホームだより』を読ませていただくと、スタッフの皆さんがフィンランドまで研修に行かれているそうですね。

橋本　ハイ、10年ぐらい前に成田からの直行便が出来て、とっても便利になったので。今年（97年）もスタッフが一ヶ月間行ってきました。そして来年の2月には、フィンランドから向こうの人がやってくるんです。今回で3度目です。

立井　お互いに行き来して、勉強し合っているわけですね。

橋本　そうなんです。それに私、これは絶対に言いたいんですけど、日本の若い人は素晴らしい！　よく「今の若い人は」とか言われてますけど、絶対そんなことはないです。ホームにも、お年寄りや障害を持つ人の力になろうって真剣に考えている人、たくさんいます。ほんとに素敵な若い人が、たっくさんいますヨ。

立井　きっと「ボランティア」の発想が、日本でもここ何年かで根付いてきたんでしょうね。

橋本　そうですね。やっぱり豊かになってきたんですよ。ちょっと専門的な話をすると、日本は福祉の専門教育がちゃんとしてますし、社会福祉士・介護福祉士などの資格制度も充実しているので「スペシャリスト」が育ちやすいんです。福祉全体のステイタスが向上してるんですね。

立井　ボランティアの延長ではなく「職業」として認められてきた。

橋本　だから、能力のある若い人たちがどんどん福祉に向かうようになりました。これからの若い人が、福祉を引っ張っていってるんですね。それに、こういう国家資格制度は北欧にはないんです。

立井　あ、北欧にはないんですか。

橋本　ないんです。だからその点で今度は日本から北欧に教えてあげられることもあるんですね。フィンランドも今、六五歳以上の割合が人口の約14%、日本とほぼ同じです。高齢化問題というのは、ひとつの国だけではもう解決できないものになっているんですね。先日もフィンランドの大統領が来日して、橋本首相と福祉を含んだ研究開発の協定を調印していきました。

立井　でも、ライヤさんや至誠ホームの皆さんは、もう何年も前から海外交流をしている。「お上」も追いついたわけだ。

橋本　そうヨ、私たちの方が早いのヨ（笑）。でも、上の人たちも私の人としてやることがあって、私たちは私たちのできることがありますからネ。ホームのお年寄りも、20年以上も前からフィンランドのお年寄りと文通をしたりして、いろいろな形で交流を深めてます。

立井　こうなってくると、遅れてるとか進んでるとか、もう関係なくなっていますね。ライヤさんと話すまでは、日本は福祉後進国だとばかり思ってましたよ……。ところでライヤさん、23年間、ずっと立川にお住まいですか。

橋本　そうです。結婚して日本に来て、ずっと立川ですヨ。

立井　ずいぶん変わったでしょう、この街も。

橋本　変わりましたねえ。立川の昔の駅、知ってますか？　私、知ってますヨ（笑）。小さな可愛い駅、ネ。

立井　23年前だから、えくてびあんよりも先輩ですからね（笑）。

橋本　立川はラッキーですよ。

立井　と、いうと？

橋本　ウチの近所には大きな多摩川が流れているでしょ、それにすぐ近くに根川の遊歩道もあって、サイクリングも出来ますし。

立井　ああ、至誠ホームのすぐ前ですね。

橋本　それに私、いつも買物や駅に行く時は自転車を使うんですけど、南口の方も開発されてどんどんきれいになってゆく気がします。ゴミのリサイクル、あれもいいですよネ。やっぱり立川も豊かになってきてます。素晴らしいです。

立井　なんだか外国人にほめられるのも妙な気分ですね（笑）。そんなにいいところに住んでたのかなあ、なんて。

橋本　私、もう外国人じゃないですよ（笑）。私の背骨、「根っこ」はもちろんフィンランドだけど、立川は私の第二の故郷。第二の根っこを、もう立川に張ってしまいました（笑）。

立井　（笑）。今日はありがとうございました。

東風

ベスト立川人・展のオープニング・パーティーは毎年、百名くらいの方々が集うて行なわれる。今年もそのようにして行なわれ、早くも十三年目になる◆開会の辞が三田鶴吉さん、閉会の辞が谷川水車さん、これが恒例になってしまった。つまり十三年間、一度もお休みがないことになる。多忙をきわめるお二人なのに、よくぞご都合をつけてくださる、万障繰合せとはこのことであろう。もう一つは健康。元気なお姿から、こちらが精気を戴くおもいがする◆谷川水車さんは四十年に亘ってこの立川に、俳句という文芸を通して文化の根を張らせた方である。四十年という歳月は決して短くない。その水車さんのご挨拶の中で、松尾芭蕉の言葉を引用して、俳句は「文台おろせば、すなわち反古」だという。文台というのは高さ二〜三寸の小さな机で、特に歌会や俳諧などの席で懐紙や短冊を載せるのに用いた。俳句なんて、文台からおろせば即、屑籠行きだという程の意であろう◆水車さんは、そんな「吹けば飛ぶよな」十七音の一行詩を四十年も続けてこられた。それもわが為の文芸ではなく、同好の志に手を差し伸べての歳月である。なにか残らぬはずはあるまい。私はパーティーの席でわが身を振り返った。えくてびあんも、一号一号は屑籠行きのような存在かもしれないが、歳月を重ねれば、その風貌に少しは重量感が加わるのではないかと◆待春や　路地に響けり　えくてびあん

連載　四字熟語（八）

築室道謀

「室を築いて道に謀（はか）る」と読む。道ばたに家を建築しようとして往来の人たちに相談すれば、めいめい勝手な意見を述べるので、いつまでたっても完成をみない。そのことから議論だおれになって計画が実現しないたとえに用いられる。

同意語に「船頭多くして舟山に登る」などがある。

えくてびあんの輪

人がゐて、街があります。
あなたがゐて、立川があります。
そこにちょっとだけ、えくてびあん！
リストのお店にはいつでも、えくてびあん！

（表紙）油彩「霞の多摩川」水落英夫（第21回三多摩美術家展より）
（編集）池田豁男　小林康史　隅川理　名尾顕真　山田恵子　大久保清志
（写真）中村伸　五来幸平　空谷空

月刊えくてびあん　第163号
平成十年二月一日発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市曙町2-17-5
杉田ビル6F　〒190-0012
電話　〇四二(528)〇〇八二
FAX　〇四二(528)〇〇六五
編集発行人　立井啓介
印刷所　㈱大廣社

私の立川原風景　第七回

佐藤多持（国分寺市）

◆ 普済寺春景 ◆

ご縁があって九十三年三月二十六日、立川市福祉会館のシルバー大学「絵の話」に出講した帰途、福祉会館前の横断歩道橋上からのスケッチです。根川ぞいは桜が咲きその崖上に普済寺がゆったりとかまえて、左の方に国宝六角塔の覆堂がみえます。普済寺は先年焼失してしまい大切な文化財が消え残念です。再興の日の早いことを念願しています。

（画家）